

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。

第15回は、参議院事務局に勤務する青木勢津子さんにご登場いただきました。

聞き手は、法学研究科の相澤美智子です。

決して前には出ない裏方の仕事だからこそ、 俯瞰して全体を見渡す力が求められています

どうせ転科するなら、新しい道を。
その再受験先が一橋だった

相澤 青木さんは参議院事務局に勤務されて23年になると伺いました。率直にいきますと、参議院事務局の役割や仕事については、あまり知られていないと思います。卒業後の進路としての的を絞られていたのですか。

青木 いえ、全然（笑）。ただ、一生できる仕事をもちたいと思っていたので、公務員は考えていました。もっと正確にいうと、高校時代は外交官への漠然とした憧れもあり、国際的な仕事に携わりたいと思っていました。だから、最初は同時通訳の技術を身につけたいとICUに入学したんです。でも、ICUは帰国子女も多くて、もともとのスキルが違う。語学教育には定評のある大学でしたが、早々に自分の限界を感じてしまいました。2年生になる際に転科できる制度があるので、それを利用しようと思っていたとき、たまたまテレビで共通一次試験願書受付のニュースを見たんです。そうか、違う大学に進む道もあるのかと、再受験することにしました。

相澤 なぜ、一橋大学を選ばれたのですか。

青木 実は高校2年のとき一橋大学を受験する友人と一緒に、見学に行ったことがあって、キャンパスの美しさがとても心に残りました。その印象が強かったせいもありますね。法学部を選んだのは、数学が苦手だったから（笑）。もともと文科系志望だったので、数Ⅱは高2の授業でやったきり。受験前に必死に勉強しました。

相澤 青木さんが一橋大学で学ばれていた当時は、女子学生も少なかったし、ビジネス社会で活躍している女性も多くなかったと思います。将来のロールモデルになるような方はいらしたのですか。

青木 私の頃は、女子学生は全学生の5%程度だったと思います。男女雇用機会均等法の施行前でしたし、仕事を続けていきたい女性は、公務員か司法試験といった資格をめざす人が多かったですね。



青木勢津子（あおき・せつこ）

1979年国際基督教大学教養学部語学科入学、1980年一橋大学法学部入学。
1984年同大学同学部卒業、参議院事務局入局、議事部議事課配属（本会議担当）。
1987年法務委員会調査室配属、同年長女出産、1991年次女出産。
庶務部厚生課、第三特別調査室（共生社会調査担当）を経て、
2005年9月より庶務部広報課広報主幹。



民間企業で働いている先輩を訪ねても、「10年後は見えない」。私は、バリバリ切り開いていくタイプではないので、公務員を志望したというのが正直なところです。参議院事務局を選んだのは、公務員の受験案内雑誌を見たことがキッカケ。結婚して子どもができたかと考えると、転勤が少ないということが魅力でした。

相澤 ゼミは民法の川井ゼミですね。大学で学ばれたことは、お仕事に役立っていますか。

青木 直接的なかたちではありませんが、参議院事務局の役割の一つに、法案の審議をサポートするというのがあるんです。その法案の問題点はどこなのか、考えて資料をつくらなければなりませんから、大学で得た法知識やリテラシーは役立っています

ね。一言ではいえませんが、一橋大学は大好き。一橋大学で学べたことが、私の人生を決定づけたという実感があります。



ています。立法過程に携わるわけですから、一般の公務員の職務内容とはやや異なる面がある。英国議会では、私たちのように議会で働く公務員を、特に「パーラメンタリアン (parliamentarian)」と呼んでいるそうです。私たちはあくまでサポートする立場、議会や

委員会の裏方といえますね。いまは女性職員も増えましたが、私は大卒女性では3人目でした。

相澤 とても興味深いですね。具体的にはどんなお仕事をなさってこられたのですか。

青木 最初は本会議の運営に関わる議事課という部署でした。本会議中は大臣席の後ろに控えていますから、大臣を間近に見られるんです(笑)。その後、調査部門に異動、法務委員会を担当し、調査や資料作成などを行いました。

相澤 特に印象に残っている法案はありますか。

青木 DV防止法案ですね。DV防止法案は、女性議員が党派を超えて集まり、プロジェクト・チームとして立法化を進めたんです。勉強会を開く過程からサポートしましたし、アメリカではすでに法制化されている、日本でも是非つくりたいという女性議員たちの熱意が法務省を動かしたという点でも印象深いですね。というのも、こうした法律は日本の法体系になじまないというのが、学識経験者や最高裁、法務省の見解だったからです。

議会を多角的にサポートする、parliamentarian

相澤 審議をサポートする役割があることも、一般的には知られていませんね。参議院事務局について教えていただけますか。



青木 参議院事務局は約1300人の職員がいますが、うち事務職員は約三分の一。ほかに議院警察の役割をもつ警務部と、会議の速記を行う記録部があります。事務部門は、運営面から会議をサポートする会議運営部門と、政策立案を支援するシンクタンクの役割をもつ調査部門、広報活動や国際交流など参議院の活動を多角的にサポートする総務部門で構成され

相澤美智子
法学研究科専任講師

家族の理解と協力があり、今の自分がいる

相澤 議会をサポートする仕事ですと、本会議中は特に忙しいと思います。遅くなることもあるでしょうし、家庭との両立は大変だっ



たのではと思うのですが。
青木 委員会や本会議の開催中は原則として詰めていますからね。与野党が激しく対立する法案があるときは、時間的にも厳しいですね。でも、辞めたいと思ったことはなかったですね。娘が2人いるのですが、当時は育児休暇がなかったの

で産前6週間・産後8週間の産休だけ。夫も私も実家が遠いので、2人で協力して乗り越えてきました。夫が新幹線で保育園に迎えに行くなんてこともありましたが、今夜の夕食づくりもそうですが、いまでも夫が全面的に家事をサポートしてくれています。正直いって子どもが小さいときは、母親が不在で寂しさを与えてしまうのではという思いもありました。でも、接する時間が短い分、一緒にいるときは一生懸命に対応しよう、子どもたちにしっかりメッセージを送ろうと思った。後ろ姿を見て育ててほしいという気持ちでしたね。

相澤 娘さんたちは、そういうお母さんをどう見ておられるのでしょうか。

青木 いま大学2年と高校1年ですが、「うるさく言われないから家にいなくて良かった」なんて言ってます(笑)。娘たちは私の応援団。特に上の娘は、何らかの仕事をもちたいと考えているのではないかと思います。

相澤 現在はどんなお仕事をなさっているのですか。

青木 広報です。参議院は今年60周年を迎えたので、記念行事の企画や取材対応など仕事の幅は広いですね。開かれた参議院をアピールし、参議院をもっと知ってもらいたい。それを通じて若い人にも政治に関心をもってほしいと思っています。高校生を対象に法案の模擬審議をやったのですが、喜んでもらえました。国会議員でも初登院のときしか入れない中央玄関から入ってもらった効果もあるか



もしれませんが(笑)。また、中学3年生までを対象に模擬審議を体験してもらうプログラムは今も行っています。

相澤 法案づくりのサポートとはまた違う難しさもあると思うのですが。

青木 取材対応はやはり神経を使いますね。笑福亭鶴瓶さんが国会を案内するというテレビ番組に対応したのですが、臨機応変に質問に答えられなかったりして冷や汗をかきました。テレビカメラがずっと回っていたので、もたもたした姿が放送されたらどうしようと、収録後は落ち込んでしまいました。実際は、うまくカットして放送されたので、ほっとしましたけど(笑)。

相澤 現在は管理職のお立場ですね。

青木 民間企業でいえば課長相当職でしょうか。20名のメンバーをしっかりと見ていく立場にあります。先程も言いましたが、参議院事務局には女性スタッフが増え

たし、一橋大学卒の女性も何人もいます。後輩たちはたくましいですよ。参議院は基本的に転勤はないのですが、外務省に出向して在アメリカ大使館に勤務している人もいます。

相澤 「パラメンタリアン」という言葉をご紹介いただきましたが、その職務を全うするには

どんな素質が求められるのでしょうか。

青木 法案の審議を支え、議員をサポートする仕事ですから、いろんな人と上手くやっていけることは必要だと思います。責任のある仕事ですが、表に出る仕事ではないので、自分が自分がというタイプは不向きでしょうね。

相澤 洞察力や行動力も必要ですが、欧米型の能動性や自己主張ではなく、静かな積極性という感じですか。

青木 そうともいえますね。あと、自分自身や場を客観的に見る目は必要だと思います。

相澤 貴重なお話をありがとうございました。これからもご活躍を期待しています。

対談を終えて

青木勢津子さんは、私の同僚、青木人志教授の奥様である。とはいえ、今回の取材は、青木先生を仲立ちにして実現したものではない。一橋大学の私の同期に、参議院に勤務するIさんという人がいる。私は最初、同級生のよしみでIさんに取材を申し入れた。しかし、彼女は諸事情により取材を受けることができなかったため、代

わりの人を紹介してくれた。それが同じ職場の先輩である青木さんだった。Iさんは「穏やかな素敵な方で、参議院の女性職員のお手本」と言って、私に青木さんを紹介してください、青木さんは「取材をお受けするのも卒業生の役目でしょうか」と快く応じてくださった。実際に青木さんにお会いして、なるほど、Iさんの言っていたことが理解できた。公務員でいらっしやるとはいえ、働く女性をサポートする社会制度が今ほど整っていない

かった時代に、実家のご両親の手を一切借りずに2人のお子さんを育てながら仕事を続けるのは、並大抵のことではなかったと思う。しかし、青木さんは「私はこんながんばって来ました」というような雰囲気をもった感じさせない人だった。私が彼女から感じたのは、静かな中にある確かな存在感と燦し銀のような輝きで、そういう彼女を、私もIさん同様「お手本」としたいと思った。(相澤美智子)